# 日中間で見解の異なる海石榴はツバキ・ザクロのどちらか

帝京大学薬学部　木下武司

【要旨】

三首の万葉歌にある海石榴は随唐の詩歌に初見し、日本ではツバキ、中国ではザクロとして見解が異なる。そこでいずれが正しいのか明らかにするため和漢・朝鮮の当該典籍の徹底的検証を行った。万葉集など上代の典籍、平安期の延喜式・本草和名・和名抄の解析結果から海石榴をツバキとして矛盾のないことを確認した。また、海（石）榴を詠う十首足らずの随唐の詩歌のうち、三首（江総・煬帝・皇甫曽）はその開花を示唆する句を含み、初夏に咲くザクロでは合わないことがわかった。すなわち、中国の見解は誤りであり、次にいかなる経緯でそうなったのか検証することにした。中国産ツバキ（山茶）の文献上の初見は酉陽雑俎續集（八六〇年ころ）、李徳裕の平泉山居草木記（九世紀始め）でいずれも盛唐である。宋代の太平廣記（九七八年）は、山茶と海石榴が似るとした上で海石榴花の特徴も記載したが、ザクロの特徴に近く、石榴と海石榴を混同していることが示唆された。一方、ほぼ同時期成立の開寶本草、その後継本草である證類本草に山茶の条はなく、また安石榴の条に海石榴に関する言及はなかった。したがって当時の中国本草は必ずしも海石榴を石榴の異名とせず、太平廣記との間に認識のねじれがあったと推定される。本草書で初めて山茶を記載したのは約六百年後の本草綱目（李時珍）で、矮性品種を海石榴とし、わが国の本草学者はこれをチョウセンザクロとした。海石榴を朝鮮渡来と誤ったのは太平廣記が「新羅に海紅并びに海石榴多し」と記載したためで、この新羅を朝鮮と誤認したのである。新羅は、圖經本草に「閩中より來るは新羅人參と名づく」とあるように、福建省（旧閩中）にあった古地名である。分類補註李太白集（南宋・楊斉賢）・芸林伐山・丹鉛総録（明・楊慎）・花史左編（明・王路）ほか、中国本草の頂点に立つ李時珍も誤った認識に基づいており、現在の中国の見解もそれを踏襲したものである。芝峰類説ほか朝鮮の典籍は宋代以降の漢籍を引用したため、やはり海石榴を石榴と誤認識してしている。

【資料1】

①あしひきの　山椿咲く　八つ峰越え　鹿待つ君が
足病之　山海石榴開　八峯越　鹿待君之
斎ひ妻かも
伊波比嬬可聞

（巻七　一二六二　古歌集）

②奥山の　八峯の椿　つばらかに　今日は暮らさね
奥山之　八峯乃海石榴　都婆良可尓　今日者久良佐祢
ますらをの伴
大夫之徒

（巻十九　四一五二　大伴家持）

③我が背子と手携はりて明け来れば　出で立ち向かひ
和我勢故等　手携而　曉来者　出立向
夕されば　振り放け見つつ　思ひ延べ　見和ぎし山に
暮去者　振放見都追　念暢　見奈疑之山尓
八つ峯には　霞たなびき　谷辺には　椿花咲き　以下略
八峯尓波　霞多奈婢伎　谷敝尓波　海石榴花咲

（巻十九　四一七七　大伴家持）

④あしひきの　八峯の椿　つらつらに　見とも飽かめや
安之比奇能　夜都乎乃都婆吉　都良々々尓　美等母安可米也
植ゑてける君
宇恵弖家流伎美

（巻二十　四四八一　大伴家持）

【資料2】

『日本書紀』（七二〇年）

（景行天皇十二年）冬十月　則ち**海石榴**樹を採りて、椎に作り兵にしたまふ。（冬十月　則採海石榴樹、作椎爲兵）

『出雲國風土記』（七三三年）「嶋根郡」

凡て、諸の山に在る所の草木は、白朮、麥門冬（中略）**海柘榴**、楠、楊梅、松、栢なり。（凡諸山所在草木白朮麥門冬（中略）海柘榴楠楊梅松栢）

『出雲國風土記』（七三三年）「意宇郡」

凡て諸の山野に在るところの草木は麥門冬、獨活（中略）椎、**海榴**　字を或は椿に作る　楊梅云々（凡諸山所在草木麥門冬獨活（中略）椎海榴　字或作椿　楊梅云々）

『和名抄』（源順　九三〇年代成立）

唐韵云　椿　勑倫反　豆波岐　木名也　楊氏漢語抄云　**海石榴**　和名同上　式文用之

【資料3】

『續日本紀』（七九七年）巻三十四

（寶龜八年五月）癸酉、渤海の使史都蒙ら歸蕃す。（中略）但、都蒙ら此の岸に及ぶ比に、忽ち惡風に遇ひて人物を損すること有り、船の駕し去る無し。彼を想ひ此を聞きて、復た以て懷を傷しむ。言に越郷を念ひて倍軫悼を加ふ。故に舟を造り使を差して送て本郷に至しむ。并びに絹五十疋、絁五十疋、絲二百絇、綿三百屯を附す。又、都蒙が請ふに縁りて、黄金小一百両、水銀大一百両、金漆一缶、漆一缶、**海石榴油**一缶、水精の念珠四貫、檳榔の扇十枝

を加附す。（以下略）

（癸酉、渤海使史都蒙等歸蕃。（中略）但都蒙等比及此岸、忽遇惡風有損人物、無船駕去。想彼聞此、復以傷懷。言念越郷倍加軫悼。故造舟差使送至本郷。并附絹五十疋、絁五十疋、絲二百絇、綿三百屯。又都緣蒙請、加附黄金小一百兩、水銀大一百兩、金漆一缶、漆一缶、海石榴油一缶、水精念珠四貫、檳榔扇十枝。）

『**本草和名**』（九一八年ころ）第十六巻「虫魚類」

不死藥二十一種　黄王芝　黄盖三重　海中紫菜　（中略）**海石榴油**　在海嶋中似安石榴　（以下略）

『**延喜式**』（九二七年）巻第二十四「主計上」

調輸錢　（中略）　出雲國　中男作物紙**海石榴油**荏油云々　周防國　中男作物紙茜黄蘗皮**海石榴油**云々　筑前國　調絲（中略）**海石榴油**一斛四斗六升四合（中略）中男作物　木綿穀皮麻席（中略）**海石榴油**云々　筑後國　中男作物穀皮（中略）**海石榴油**云々　肥後國　中男作物木綿（中略）**海石榴油**云々　豊前國　中男作物防壁（中略）**海石榴油**云々　豊後國　中男作物熟麻（中略）**海石榴油**云々　壱岐嶋　自餘輸**海石榴油**　云々

『**延喜式**』巻第三十「賜蕃客例」

大唐皇　銀夂五百両　水織絁美濃絁各二百疋　（中略）　**海石榴**油六斗　甘葛汁六斗　金漆四斗

第九次遣唐使（七三三年～七三五年）献上品

『冊府元龜』巻九七一

開元二十二（七三四年）年四月、日本國遣使來朝、獻美囊絁二百匹、水織絁二百匹

**【資料４】**

『**汉语大词典**』（罗竹风主编　汉语大词典出版社）

**【海榴】**　即石榴。又名海石榴。因来自海外，故名。古代诗文中多指石榴花。隋江总《山庭春日》诗：“岸绿開河柳，池红照海榴。”唐李白《咏邻女东窗海石榴》诗：“魯女東窗下，海榴世所稀。”王琦注引《太平广记》：“新羅多海红並海石榴。”元张可久《一支花·夏景》套曲：“海榴濃噴火，萱草淡堆金。”明唐寅《川拨棹》词：“碧碧草沿堦，海榴半吐綻。》

**【資料５】**

ツバキ　*Camelia japonica* L.

常緑小高木　照葉樹林（ヤブツバキクラス）の標徴植物種

分布：本州・四国・九州・南西諸島　朝鮮南端・台湾

花期：十二月～三月

ザクロ　*Punica granatum* L.

落葉小高木

分布：西アジア原産

花期：六月～七月

**【資料６】**

『**大和本草**』（貝原益軒　一七〇九年）

延喜式ニモツバキヲ海石榴トカケリ。順和名抄モ同ジ。

日本ノ古書ニツバキヲ海石榴トカケルモ由アル事ナリ。酉陽雜俎續集ニ曰フ、山茶ハ海石榴ニ似タリト。然ラバ山茶ト海石榴ハ別ナリ。

朝鮮石榴ツネノ石榴ノ葉花實ノ如クニシテ小ナリ。夏ヨリ花サキ冬マデ月ヲ逐テ花サキミノル。

『本草綱目啓蒙』（小野蘭山　一八〇三―〇五年）

一種チャウセンザクロアリ一名ナンキンザクロ。木ノ高サ尺ニ盈タズシテ花實アリ。肥地ニ栽ユレバ丈許ニ至ル。花色殊ニ赤キ故火石榴ト云。海石榴モ同物ナリ。ココニ分テ二ツトスルハ非ナリ。

『古今要覽稿』（屋代弘賢　一八二一―四二年）巻第三百七「海榴」

岡村尚謙曰風土記に海榴字或作椿と見えたれば海榴は即海石榴の省呼なるはしるし（ママ）。然れば和訓栞に格物叢談を引て榴花有從海外新羅國來者故名曰海榴といへるはこれと同物異名にして即安石榴をさしていひ、又本草綱目安石榴條に海石榴高一二尺即結實是異種也といひし海石榴もまた安石榴の海外より傳はりしものなれども、秘傳花鏡に海榴花跗萼皆大紅心内鬚黄如粟密といへるはすなはち本條の海榴なり

【資料７】

『本草綱目』（李時珍　一五九六年）「安石榴」

〔時珍曰く〕榴は五月に花を開く。紅黄白三色有り。單葉なるは實を結び、千葉なるは實を結ばず、或は結びて亦た子无きなり。實に甜酸苦の三種有り、抱朴子は言ふ、苦きは積石山に出づと。或は云ふ、即ち山石榴なりと。（中略）又、南中に四季榴有り、四時花を開き、秋月に實を結び、實方に綻び随ひて復た花を開く。火石榴有り、赤色なること火の如し。海石榴は高さ一二尺にして即ち實を結ぶ。皆、異種なり。（以下略）（時珍曰榴五月開花。有紅黄白三色。單葉者結實、千葉者不結實、或結亦无子也。實有甜酸苦三種、抱朴子言、苦者出積石山。或云、即山石榴也。（中略）又、南中有四季榴、四時開花、秋月結實、實方綻随復開花。有火石榴、赤色如火。海石榴高一二尺即結實。皆異種也。）

【資料８】

『陳詩』巻八「山庭春日詩」（江総五一九年―五九四年）

洗沐惟五日、棲遲一丘に在り。
古槎近澗に横たひ、危石前洲に聳ゆ。
岸緑に河柳開き、池紅に海榴照らす。
野花寧ぞ晦を待ち、山蟲詎ぞ秋を識るや。
人生復た能く幾ぞ、夜燭長游を非る。

（洗沐惟五日、棲遲在一丘。古槎横近澗、危石聳前洲。岸緑開河柳、池紅照海榴。野花寧待晦、山蟲詎識秋。人生復能幾、夜燭非長游）

『爾雅』郭璞注　檉は河柳なり　今、河旁なる赤莖の小楊なり（檉、河柳　今、河旁赤莖小楊）

『**本草綱目**』巻三十五「木部」
楊の枝は硬くして揚起す、故に之を楊と謂ふ。柳枝は弱にして垂流する、故に之を柳と謂ふ。蓋し、一類の二種なり。（楊枝硬而揚起、故謂之楊。柳枝弱而垂流、故謂之柳。蓋、一類二種。）

**【資料9】**
『**初學記**』巻二十四「宴東堂詩」（煬帝五六九年～六一八年）
雨罷みて春光潤ひ、日落ちて暝霞暉く。
**海榴舒びて盡きんと欲し、山櫻開きて未だ飛ばず。**
清音歌扇に出でて、浮香舞衣を颺ぐ。
翠帳全て戸に臨み、金屏半ば扉を隱す。
風花極无きを意ひ、芳樹禽の歸るを曉る。
（雨罷春光潤、日落暝霞暉。海榴舒欲盡、山櫻開未飛。清音出歌扇、浮香颺舞衣。翠帳全臨戸、金屏半隱扉。風花意無極、芳樹曉禽歸。）

『**説文解字**』に「櫻　果名、櫻桃なり。一名含桃。」

**【資料10】**
『**全唐詩**』**巻二一〇**「韋使君宅海榴詠」（皇甫曽）
七五三年進士及第
淮陽の臥理清風有り
**臘月の榴花雪を帶びて紅し**
閉閣寂寥として常に此に對く
江湖の心數枝の中に在り
（淮陽臥理有清風、臘月榴花帶雪紅。閉閣寂寥常對此、江湖心在數枝中。）

**【資料11】**
『**海棠譜**』（宋・陳思）巻上「敍事」
凡そ今の草木、海を以て名と爲すは、酉陽雜俎に云ふ、唐贊皇李德裕嘗て言ふ、**花名の中の海を帶ぶ者は悉く海外より來る**と。故に海櫻、海柳、海石榴、海木瓜の類を知れり。俱に記述に聞こゑず。豈多くを以て稱と爲さんや。又、多からず。誠は恐らく近代に之を海外より得るのみ。（凡今草木以海為名者酉陽雜俎云唐贊皇李德裕嘗言花名中之帶海者悉從海外來故知海櫻海柳海石榴海木瓜之類俱無聞於記述豈以多而為稱耶又非多也誠恐近代得之于海外耳）

**【資料12】**
『**全唐詩**』**巻八二七**「山茶花」（貫休八三二年～九一二年）
風裁日に染まり仙囿を開く。百花の色死猩血に謬ふ。
今朝一朵階前に墮つ。應に看人有り孫秀を怨むべし。
（風裁日染開仙囿。百花色死猩血謬。今朝一朵墮階前。應有看人怨孫秀。）

『**酉陽雜俎續集**』（段成式　八六〇年ころ）巻第九「支植上」
**山茶は海石榴に似て桂州に出づ。**蜀地に亦た有り。
（山茶似海石榴出桂州。蜀地亦有。）

『**酉陽雜俎續集**』（段成式　八六〇年ころ）巻第十「支植下」
**山茶花、山茶葉は茶樹に似て**高き者は丈餘り、花の大さ寸に盈ち、色は緋の如く、十二月に開く。

（山茶花山茶葉似茶樹高者丈餘、花大盈寸、色如緋、十二月開。）

『**平泉山居草木記**』李徳裕（七八七年―八四九年）

又、得番禺**山茶**、宛陵紫丁香、會稽百葉木芙蓉、百葉薔薇、永嘉紫桂簇蝶、天台海石桂云々

**【資料13】**

『**太平廣記**』（九七八年）同巻第四百六「山茶」

『酉陽雜俎續集』巻第九を引用

『**太平廣記**』（九七八年）同巻第四百九「山茶花」

『酉陽雜俎續集』巻第十を引用

『**太平廣記**』（九七八年）同巻第四百九「海石榴花」

**新羅に海紅并びに海石榴多し**。唐贊皇李徳裕は言ふ、花中に海を帯ぶ者は悉く海東より来ると。章川花差海石榴に類す。五朶簇生、葉は狭く長く、重ね沓ひて承く。（新羅多海紅并海石榴。唐贊皇李德裕言、花中帶海者悉從海東來。章川花差類海石榴。五朶簇生、葉狹長重沓承。）

**【資料14】**

『**花史左編**』（王路　一六一七年）「石榴」

**其れ本は安石榴と名づけ、亦た海榴と名づく**。一種に富陽榴あり、結實して大なるは碗の如し。餅子榴は則ち花大にして結實せず。山東に番花榴有り、其の花尤も餅子榴より大なり。又、一種有り、身は二尺を過ぎず、盆中に栽ゑて子を結ぶ。亦た榴樹は大石を壓して亦た生ず。嫩條を取り、肥陰の地に挿せば、活せざる者無し。子を肥土中に沉めれば、次の年亦た花を開くべし。大抵の榴の性は肥を喜み、濃糞之を澆ぎて忌むこと無し。二月初めに、嫩枝の指大の如きを取り、長さ（一）尺許りを斬り、指脚を以て一二寸の皮を刮去し、深く背陰の處に挿す。若し白榴の枝を以て紅石榴の枝上に挿すときは其の花は粉紅、然れども粉紅なるは亦た自て種有り。燕中に千辨なる有り、白千辨、粉紅千辨、黄千辨、大紅（千辨）の四色有り。単辨なるは他處に比して不同。中心の花辨は起てる樓臺の如く、之を重臺石榴花と謂ふ。頭は頗る大にして色更に深紅なり。（其本名安石榴、亦名海榴。一種富陽榴、結實大者如碗。餅子榴則花大而不結實。山東有番花榴、其花尤大於餅子榴。又有一種、身不過二尺、栽盆中結子。亦榴樹壓大石亦生。取嫩條、挿肥陰地、無不活者。沉子肥土中、次年亦可開花。大抵榴性喜肥、濃糞澆之無忌。二月初、取嫩枝如指大者、斬長尺許、以指脚刮去一二寸皮、深挿於背陰處。若以白榴枝挿於紅石榴枝上其花粉紅、然粉紅亦自有種。燕中有千辨、白千辨、粉紅千辨、黄千辨、大紅有四色。単辨者比他處不同。中心花辨如起樓臺、謂之重臺石榴花。頭頗大而色更深紅。）

**【資料15】**

『**太平廣記**』（九七八年）同巻第四百九「海石榴花」

資料13

『**分類補註李太白詩**』（南宋・楊斉賢）

『**太平廣記**』（九七八年）巻第四百九

新羅に**海紅并び**に海石榴多し（新羅多海紅并海石榴）

『**白孔六帖**』（白居易撰）巻九十九「石榴」

新羅に海石榴多し（新羅多海石榴）

【資料16】

**今村与志雄訳注『酉陽雑俎5』**（平凡社、一九八一年）

『新書』四十一「地理志」

新羅　古代中国の江南道汀州（今の福建省龍岩）

『**圖經本草**』（蘇頌）

又、河北の権場及び**閩中より來るは新羅人參と名づく**（又、有河北権場及閩中來者名新羅人參）

【資料17】

『**通志略**』「海紅」（南宋・鄭樵）

棠棃　其の花、之を海棠花と謂ふ。其の實、之を**海紅子**と謂ふ。（其花謂之海棠花。其實謂之海紅子。）

『**橘錄**』

**海紅柑**の顆極めて大にして、（一）尺以上の圍に及ぶ者有り。皮は厚くして色は紅、之を藏すること久しくすれば味は愈甘し。木の高さ二三尺にして數十顆を生ずる者有り、枝重く地に委がる。亦た是の柑を愛すべし。可けれども以て遠きに致し、今の都下、道旁に堆積する者多し。此の種、初めて近海に因む故に海紅を以て名を得るなり。（海紅柑顆極大有及尺以上圍者皮厚而色紅藏之久而味愈甘木高二三尺有生數十顆者枝重委地亦可愛是柑可以致遠今都下堆積道旁者多此種初因近海故以海紅得名）

『**雲麓漫鈔**』（宋・趙彦衛）

永嘉人、柑の大にして留むに可へて歳を過ぐ者を呼びて**海紅**と曰ふ（永嘉人呼柑之大而可留過歳者曰海紅）

『**秋林伐山**』（楊慎　一四八八年―一五五九年）巻六「海紅花」

菊莊劉士亨の詠山茶詩に云ふ、小院猶ほ寒く未だ暖かざる時、海紅花發きて景遲遲たり。半深半淺なるに東風裏まり、好是徐に帶雪の枝を熙こすと。蓋し、**海紅は即ち山茶なり**。而して古詩に亦た淺きは玉茗と為し深きは都勝なりと有り。**大なるを山茶と曰ひ、小なるを海紅と曰ふ**。（菊莊劉士亨詠山茶詩云、小院猶寒未暖時、海紅花發景遲遲。半深半淺東風裏、好是徐熙帶雪枝。蓋海紅即山茶也。而古詩亦有淺為玉茗深都勝。大曰山茶、小曰海紅。）

【資料18】

『**芝峰類説**』（李睟光　一六一四年）巻十九

**我が國の石榴は乃ち古の所謂海榴なり**。李白註、新羅に海紅并びに海石榴多しと云ふ。（我國之石榴乃古所謂海榴也。李白註、新羅多海紅并海石榴云。）

『**芝峰類説**』（李睟光　一六一四年）巻二十

冬栢樹、南方の海邊に生ず。葉は冬にても青し。十月以後開花す。色深紅、耐ふること久しく、凋まず。蓋し古の所謂山茶花なり。花の開く時毎に、翠鳥有り、來りて其の花蘂を食ふ。夜、或は樹間に棲止す。崔元祐の題茂珍客舎詩に修竹家家翡翠啼くといふは是なり。按ずるに、劉士亨は山茶詩を詠みて曰ふ、小院猶ほ寒く未だ暖かざる時、海紅花発きて景遅遅たりと。**楊愼云ふ、海紅は即ち山茶なり。又、云ふ、大なるを山茶と曰ひ、小なるを海紅と曰ふと。**（冬栢樹生南方海邊。葉冬青、十月以後開花。色深紅耐久不凋。蓋古所謂山茶花也。毎花開時、有翠鳥、來食其花蘂。夜或棲止樹間。崔元祐題茂珍客舎詩、修竹家家翡翠啼、是矣。按劉士亨詠山茶詩曰、小院猶寒未暖時、海紅花發景遅遅。楊愼云、海紅即ち山茶也。又云、大曰山茶、小曰海紅。）

**【資料19】**

**『本草綱目』**「海紅」（李時珍　一五九六年）

時珍曰く、飲膳正要の果類に海紅有るも出處を知らず。此れ即ち**海棠梨の實**なり。狀は木瓜の如くして小さく、二月に紅花を開き、實は八月に至りて乃ち熟す。（時珍曰、飲膳正要果類有海紅不知出處。此即海棠梨之實也。狀如木瓜而小、二月開紅花、實至八月乃熟。）

**【資料20】**

**『全唐詩』**巻一八三「詠鄰女東窗海石榴」（李白　七四一年）

魯女東窗の下、**海榴、世に稀なる所**。
珊瑚、緑水に映ずるも、未だ光輝を比するに足らず。
清香、風に隨ひて發し、落日、好鳥歸る。
**願はくは東南枝と爲り、低擧して羅衣を拂はん。**
由無く共に攀折して、領を引きて金扉を望む。
（魯女東窗下、海榴世所稀。珊瑚映緑水、未足比光輝。清香隨風發、落日好鳥歸。願爲東南枝、低擧拂羅衣。無由共攀折、引領望金扉。）